The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞後藤昭雄編『金剛寺蔵 注好撰』
Author(s)	阿部, 泰郎
Citation	語文. 1989, 52, p. 55-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68799
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

後藤昭雄編『金剛寺蔵　注好撰』

阿部泰郎

『注好撰』は、平安末期に成立した説話集である。早く『今昔物語集』の典拠のひとつとなり、のち『私聚百因縁集』や『教訓抄』などに引かれ、中世説話世界に大きな影響を及ぼした。その編纂形態から察するに、童蒙教訓とりわけ寺家の子弟教育の用に供されたことが知られる。それは、説話のみならず中世文学の大方の生成に基礎的かつ根本的な役割を果たした幼学書や類書の、我国における早い時期の聚成のひとつというべきものである。漢籍や仏典から選びだされた故事や逸話は、簡潔な漢文によって抄約され、編むには上（中国説話）・中（仏教説話）・下（動物説話）の三巻に分かたれて一箇の体系をかたちづくっている。

これには従来、仁平二年（一〇五二）書写の東寺観智院本が三巻を備えた最善本として知られていた（東寺貴重資料刊行会『古代説話集注好選』馬淵和夫編・東京美術・一九八三）が、なおそれは取り合せ本で中巻の抄出を含む別本で完本ではなかった。しかるに、これを補い訂すべき新たな伝本が、ここに出現した。

編者によって金剛寺聖教のうちより見いだされた本書は、元久二年（一二〇五）書写の一冊、表題の下に「中巻并下」とあるように、中巻と、抄出された下巻の一部九話が併せられた零本である。その中巻は六十話を収め、観智院本にない第四十一話から第六十話まで、二十話の新出説話がここに紹介されたのである。

その詳細について、編者は別に『文学』誌上において、「金剛寺本『注好撰』の出現」（第五五巻一〇号・八七年十月）に斯本の性格と新出の注目すべき説話について紹介されつつ考察を加えられており、本書と併せみるべきものである。

本書は、金剛寺本に関しての資料紹介に徹するものである。説話目録、本文の影印、翻刻と校異、解説、さらに索引を加えて構成される。周到な配慮によるこの構成は、このようなテクストを紹介する際の模範例であろう。

編者は、本書を検討された上で幾つかの知見を示されている。金剛寺本中巻がなお完本ではないこと、中国の世俗説話も収められて必ずしも仏教説話のみで統一されたものでないことを指摘され、また下巻については「付禽獣明仏法」という副題からそのテーマを明らかに示された。

「あとがき」で編者は、金剛寺においてこの本を見いだすに至った過程を述べておられる。そこには、控え目ながらも、丹念で持続的な調査がやがてこの発見に結実する経緯が明かされている。それは決して声高に喧伝されるようなものではない。新資料の〝発見〟ということがいかなるものであるか、この着実な仕事自体がなにより雄弁にものがたっている。それこそ同学の鼓舞されるところであろう。

（一九八八年十月刊・和泉書院・五、八〇〇円）

—大阪大学文学部助手—